東方學報 京都第 97 册（2022）：504-482 頁

漢字の意味と構造についての論理學的な試論

―― 文字論と字符論を手掛かりにして ――

白　須　裕　之

1　はじめに
2　問題の所在
　2.1　漢字の基本的な性格
　2.2　文字論
　2.3　表語の問題點
　2.4　漢字の扱い方
3　表現と意味
　3.1　意味作用
　3.2　範疇的形式
4　漢字の意味作用
　4.1　純粹論理學的文法
　4.2　核素材としての漢字
5　文字と字符という二つの階層
　5.1　字符論
　5.2　核素材としての字符
6　おわりに
A　核形式と核素材の形式化

要　旨

漢字についての研究と言えば，說文以來の長い傳統をもち，主にその形音義についての歷史的，經驗的な姿を考究した樣々な文獻が存在するが，漢字そのものの理念的な姿について言及したものは意外と少ない。そうした狀況で，文字の言語的な機能に注目した文字論や，漢字構造における意符や音符について議論した裘錫圭氏の字符論が，漢字そのものを扱った論考として注目される。

本稿は文字論や字符論を手掛かりに，漢字の基本的な性格についての問題點を明らかにし，その上で E. Husserl（1859-1938）初期中期の意味論を基礎として漢字の理念的な姿を論理學的に究明しようとするものである。漢字の意味作用を一般の言語的な表現の意味作用として捉え，漢字がどのような形式と素材から構成されるのかを明らかにする。その際，Husserl の純粹論理學的文法の鍵概念である核構成物（形式と素材の統一）を中心に据え，漢字の基本的性格である表語や構造についての概念の意味を明確化することを試みる。

1 はじめに

筆者は中國古典文獻の電子的なテクストを構築する爲に，まず漢字情報の形式化に取り掛かったのであるが，文字學や文字論についての様々な文獻に當たっても，漢字についての情報を形式化する爲の手掛かりが一向に明確にならないことに氣付き始めた（文獻[6][7] 參照)。我々が普段から讀み書きに使用している漢字という概念が，形式化に耐えられないような曖昧な概念であろうとは，これまで豫想も着かなかったのである。

漢字の歴史的な起源を何處に置くかということについては多くの意見があろうが，それでも漢字についての古典である『說文解字』が後漢，その注釋書である『說文解字注』が清朝半ば，そして現代でも様々な文字學，文字論の文獻があり，何世紀にも亘って多くの著書が著されているのに，これはどうしたことであろうか？これらの書物からは漢字の性質，漢字についての歴史的な情報，形や音や意味の變遷などの漢字の個々の情報については，非常に多くの事柄を扱っていて，裨益されること大なるものがある。しかし，漢字という對象そのもの，理念的な對象としての漢字については，扱っていても僅かであるに過ぎない。情報化すべき漢字についての性質は豐富であるのに，その情報を形式化すべき方途が見付からないのである。

これらの文獻で漢字そのものの性質を扱ったものは，典型的な例で言えば，漢字の構造についての議論である基本類型（例えば六書說など)，或いは漢字が表意文字なのか，表語文字なのかといった議論があるに過ぎない。

更に漢字の基本類型の解釋で注目すべきは，字符論を提出した裘錫圭『文字學概論』[12] の二章「漢字的性質」であり，また，その議論を敷衍した文獻［1］の論考である。

本稿では漢字の基本的な性格を捉える大方の見方を述べ，その問題點を議論する。その議論から漢字の表現作用を理解すべく，それを包括する言述の表現作用の枠組みについて述べる。また，漢字の表現作用をこの枠組みで明確化する。次に字符論で不明確であった，字と異なる字符概念をこの立場で議論する。

2 問題の所在

本節ではこれまでの漢字についての議論を概觀し，漢字の基本的な性格についてどのような點に注目すべきかを述べる。

2.1　漢字の基本的な性格

まず文献［3］で取り上げられた「漢字の基本的な性格」から始めよう[1)]。そこでは出土文献に見える漢字を理解するために，漢字を見るときの二つの基本的な立場が提出されている。一つ目は漢字についての傳統的な理解で，以下のように述べる。

> 上の圖一（本稿では圖１の左側）は私たちの常識的な理解，傳統的な理解です。漢字には字形，字音，字義の三要素があり，それらが一つの字に對して對等の關係を結ぶのがこの圖です。しかしこのモデルには一つの大きな缺陷があります。それは，我々が目にするのは字の形であって，字とは形そのものだという點です。字形，字音，字義は決して對等の關係にはありません。（大西［3］93-4 頁）

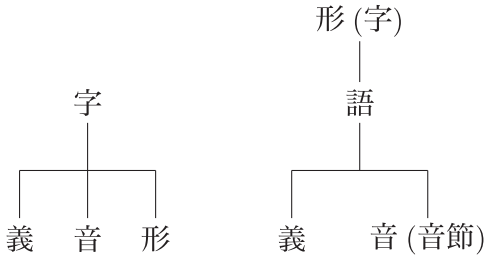

圖１　漢字の基本的な性格

二つ目は，この缺陷に答えて提出される表語文字 logogram の概念である。卽ち，可視化できる形だけを字として，それが義と音をもつ語と結びつくと考える。出土文献に見える漢字を理解するにはこの表語文字の立場が必要であると述べる。

> そこで字形を一つにして，音と義との關係を表したのが下の圖二（本稿では圖１の右側）です。この圖によって初めて字と言葉との關係を的確に捉えることができます。…圖二（本稿では圖１の右側）は言葉が先にあって，それをどのように書きあらわそうかという文字を作った蒼頡の視點であると言って良いでしょう。文字と言葉との關係が流動しつつあった古代では，この觀點が極めて重要だと考えています。（大西［3］94 頁）

1）　文献［3］は秦が行なった文字統一について解説する。そのために議論を單純化するという目的で，言葉が先にあったという前提が使用されたと考えられる。本稿でも問題の所在を明らかにするために，この方策を利用させて戴いた。

果たして，このような「漢字の基本的な性格」の理解で，漢字自體の姿を捉えることができるのか，というのが本稿の疑問である。

2.2　文字論

文獻［4］では，漢字は表意文字 ideograph ではなく，表語文字 logograph であることを述べ[2-4]，「文字の研究，とりわけ文字の言語的機能を扱う文字論」の必要性を說く。

> 文字の研究は由來古い。殊に中國では說文以來の長い傳統がある。しかし從來の文字の研究，すなわち文字學は文字の外形またはその發展に主眼が置かれていて，文字と言語の關係については十分考察がなされなかった。筆者はかねがね言語學の中で文字に對する考察が不當に低く扱われているのを歎き，當然文字の言語的機能を專門に取り扱う分野のあるべきを主張して來た。その分野が文字論である。（河野［4］64 頁註（1））

文字論は「文字の言語的機能を取り扱う」というが，六書，特に「諧聲文字論」「轉注

2）　文獻［4］「諧聲文字論」に「漢字は表意文字（ideograph）であるといふのが通說である。この定義はしかし必ずしも正確ではない。寧ろ表語文字（logograph）であるといふべきである。」とある。この章は『東京教育大學漢文學會報』第 14 號，1953. 3 が初出で，引用文の注に「尙，logograph といふ語に就いては趙元任，A Note on an Early Logographic Theory of Chinese Characters, *HJAS*, Vol. 5, No. 2. 1940（pp. 189–191）を見よ。」とある。文獻［15］では，象形文字 pictograph，指事文字 ideograph，會意文字 compound ideograph を說明した後に，「これまでの三つのカテゴリーに屬す漢字が，屢々漢字の代表的なものとして上げられるが，實際には漢字のほんの一部に過ぎず，それらが語（または寧ろ形態素）を表わし，直接意味を表わしていないことに注意しなければならない。それ故，それらは嚴密には象形文字，或いは表意文字 ideograph ではなく，Peter A. Boodberg の用語に從うならば，表語文字 logograph 卽ち，話された語を表わす書記記號である。」とある。

3）　構造言語學の代表的な文獻である H. A. Gleason : *An Introduction to Descriptive Linguistics*（Revised ed. Rinehart and Winston, 1961. ; 1st ed. Henry Holt, 1955. 邦譯竹林滋・橫山一郎譯『記述言語學』大修館書店，1970. ）の 25 章では「文字體系」を扱っている。文字體系はその基本要素である文字素 grapheme から構成される。文字素は基底となる音聲言語の構造の特定の部分を表わし，それを文字素の指示對象 reference という。文字體系はその指示對象の型で分類されるが，その第一のものが音素的指示對象，第二のものが形態素的指示對象である。そして，形態素的指示對象をもつ文字素を，普通，表意文字 ideogram というとしている。ここでは ideogram を「表意文字」と譯し，形態素文字の意味で使っている。當時の英文の用語とその邦譯に混亂が見られるようである。

4）　また，Gleason の著作には中國語の文字について，「中國語は，表意文字的であると稱される文字體系の典型的な例である。. . .［中國語の］文字素（これは當然非常な多數に及ぶのであるが）の大多數は，曖昧さのない形態素的指示對象をもっている」（邦譯 458 頁）とある。

考」「假借論」の議論では，文字の表語ということが前提とされ，それぞれの表語の仕方に終始する。卽ち諧聲，轉注，假借の扱いは言語的機能から説明されている譯ではなく，文字そのものの言語的機能は扱われていない。

文獻［11］では，文獻［4］の「轉注考」を下敷きに，轉注の意味が長らく不明であった原因を，六書がコトの分類であったものを，モノの分類と誤解していたからであるとして，その論證を行なっている。

「六書」という語の初出は『周禮』地官・保氏である。「六書」は「六藝」の一つであり，「六書」以外の五藝は國史の行なう動作，卽ちコトの分類であるとする。これは目に見えるモノを竝べたのではなく，するコトを列擧しているのである。

> 言葉から離れて字形のみでは，六書の説明はできない。文字とは言葉を寫すものだからである。…「六書」は，漢字の構成原理というモノの分類ではなく，言葉を「漢字」でどのように書き表すかというコトの分類である。文字の分類ではなく，表記法の分類である。「造字」とは「字を造る」ことではなく，「（言葉を）字に造る」ことである。（村上［11］9頁）

こうして「六書」は形の分類でなく，文字の言語的機能の分類であることを述べる。ここで表語という仕組みを使って，轉注と假借がどのように理解されているかを簡單に見ておく[5)]。

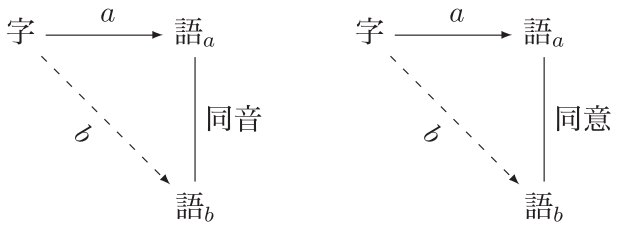

圖２　假借と轉注

まず圖２の左の假借の場合を見よう。簡單のために文字を持たない「語$_b$」があったと

5）文獻［11］も文獻［4］も六書成立時の造字，あるいは用字について議論しており，言葉としての「語」についてはあまり語られていない。文獻［11］第一章七節「語の發生」で，「語」の定義の曖昧性を述べているが，表語という仕組みに終始している。わずかに「逆説的に，文字で表現することによって「語」が出來たと言えるかもしれない。」と述べるにとどまる。

し，「語$_b$」に文字を與える製字の假借について考える。「語$_b$」と同音である（或いは近い音をもつ）他の「語$_a$」が「字」を持っているとする。圖の矢印「字 $\xrightarrow{a}$ 語$_a$」は「字」が「語$_a$」を表わしていることを示す。このとき，その字を借りて，「語$_b$」を表わすのが假借である。卽ち，矢印「字 $\xrightarrow[b]{}$ 語$_b$」が假借によって，新たに「字」が「語$_b$」を表わしていることを示している。

同様に圖２の右は轉注である。文字を持たない「語$_b$」に對して，同意である（或いは意味の近い）他の「語$_a$」を表わす字を借りて，「語$_b$」を表わすのが轉注である。ここで「語$_a$」も「語$_b$」も音義をもつ。「字」も形音義をもつが，その音義はどのようになるかということが問題になる。「字」の音義は「語$_a$」を表わすときは「語$_a$」の音義，「語$_b$」を表わすときは「語$_b$」の音義と考えてよいであろうか。この問題については後ほど，字符論に關連して議論しよう[6)]。

2.3　表語の問題點

以上見てきた表語文字の問題點について議論しよう。漢字が語を表わしているということは，表語という仕組みの外で漢字と語の兩者が別々に定義されることを意味する。語（或いは形態素）は音聲と意味を結びつける表現の統語論的な差異で定義される。卽ち，音聲言語の中で定義された語を漢字が表わしていることになる。

こうした表語の仕組みによっては，以下のような漢字の性質を扱うことが困難になってしまう。

まず漢字の發生，形成の歷史を扱う文字學の議論を見てみよう。甲骨文字や金文などの初期の漢字を扱うには，骨の削り跡や金屬の鑄造などを漢字として捉える必要があるが，この曖昧な形狀のものをどうして漢字として捉えられるのであろうか。更に甲骨文字や金文などの意味が確立していない場合，それをどのように扱ったら良いか。これは現代の我々が，インクの染みなどをどのように漢字として捉えるかとも通じる問題である。このようなに漢字であること，卽ち漢字性を扱うには表語の仕組みの外で，漢字が定義されると考えるのでは不都合が生じる。表語という立場では漢字性を捉えることも，扱うことも出來ないであろう。また，異なる形狀をしているもの，例えば，二つのインクの染みが同一の漢字であることをどのようにして知ることができるのか。漢字の音義

6）ここでの議論は音義に關してあまりにも單純化したきらいがある。文獻［4］では「假借の表音範圍」「義符，聲符の機能」などの論述が見られるが，これらの論述を表語の仕組みにどのように反映させるかという議論がない。文獻［11］での漢字の扱いは，字も形だけでなく音義をもつことを明言し，語の音義と區別する。

を語に押し込んでしまっては，漢字の同一性も定義できない。

同様に意味が分からなかったり，或いは意味が曖昧であった漢字が，讀みの深化に伴って，意味が明確化していくことを表語でどのように扱うのか。意味の不明な漢字というのは，意味の不明な語というものを考えるのは不自然であるから，表語で示される語が明らかでないということになる。更に解釋が深化していく場合は，曖昧な語，少し意味の分かる語，更に意味の分かる語のようなものを想定して，順に表語が明らかになっていくことを考えるのか。そもそも意味が曖昧な語や少し意味の分かる語は定義することさえ不可能である。

漢字がある意味をもっている，漢字をこのように解釋するといったことに，どのような根據を持たせることができるだろうか。表語では漢字に語を對應させるだけであるから，その對應のさせ方に根據を與える仕組みが必要であるが，表語文字と言った場合，そのことが扱われない。古文字を解釋する場合，統語論的な情報以外に解釋を正當化することはできるのだろうか。そもそも現代人が古文字を解釋できる根據は何處にあるのか。

漢字を表語文字と考えることは，意味（音義）の問題全てを語の向こう側に閉め出してしまう。我々には漢字と意味の關係をより良く考察するための方法が必要なのである。これからの議論のために，表語文字としての漢字の問題點を纏めると，少なくとも以下のような項目が想定できるだろう。

1. 漢字性の曖昧さ，漢字の同一性
2. 讀みの深化，解釋の深化
3. 漢字解釋の根據，古文字の解釋の可能性

2.4　漢字の扱い方

漢字と語という言語單位の關係を想定することになった背景には以下がある。古代中國の音韻については，上古音は周代以降の再構音である。上古では語はほぼ一音節，字もほぼ一音節に對應し，これを基に字・語・音の關係を考えている。表語文字という發想もここに基づいているだろう。

現代の言語學では形態素や語は音聲との關係で定義され，意味は言語體系の中の差異で定義される形相的なものであった。卽ち，言語學で使われる意味は實質とは別のものである。字，形態素，語，音節の對應關係は様々であった。本稿では字が形態素を表現する，或いは語を表現するといった，字が何か言語單位を表現するものであるという前

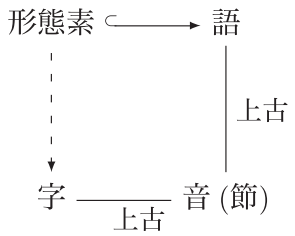

圖 3　言語單位と文字

提を置かずに，これ以降の議論を行なうことにする。

3　表現と意味

問題の所在で見たように，漢字というものを考える上で言語體系を豫め與えられたものとせずに，本稿では漢字がどのような言語的機能をもつかということを議論しようとするものである。それは言語學の對象，例えば，言語單位のようなものを豫め，外から與えられたものとせず，漢字を使って文書を書いたり，漢字で書かれた文書を讀んだりといった，言語を使って行なわれる體驗の在り方から接近しようというものである。

そこで言語的な表現作用に注目するために，本稿では E. Husserl（1859–1938）の初期の意味理論を使用する。その著書［19］は大部の上に，內容も錯綜しているので，ここでは前人の研究，特に［2］［5］［9］を大いに利用させて頂く。この理論を利用して，これまでに提出した漢字に關わる樣々な意味を統一的に理解することを目指す。

3.1　意味作用

文字は言葉を寫したものではなく，思想，認識，感情，要求などを表現するものであるだろう。言葉を書き留めるために文字を使う場合でも，例えば，講演や演說の言葉を文字起こして，言葉を寫す場合もあるが，これは本來，講演者，演說者の話した內容に關心があって，その音聲を書き留めようという譯であり，話された言葉を文字面に變換すること自體が目的ではないであろう。更に文章を讀むという場合には尙更，その文章に書かれた內容に關心があるのである。文字面に關心があるのは，その文章を文學的に評價したり，文章表現に興味があり，どのような言葉で書かれているかに關心があったり，或いは言語自體に興味があったりなどの特殊な場合ではないであろうか[7)]。

7）素讀などの行爲は內容への接近を敢えて控え，言葉のみを與えることで，內容への興味を釀成するという敎育效果を狙ったものであるということが，文字が內容を表現しているこ↗

我々は様々な言述を使用して，認識，思想，感情，要求などを表現している。Husserlは『論理學研究』第六研究の序論で以下のように述べている。

> すべての思考，とりわけすべての理論的な思考と認識は，それを表現する說話と關連して現われる《作用》の中で遂行されるものである。〈思考客觀および認識客觀，もしくはそれらの說明根據および法則，それらについて理論および學問などとして思惟者に對立する，あらゆる妥當性の統一體〉の源泉は，まさにそのような作用のうちに伏在している。(Husserl［19］邦譯『論理學研究』4巻15頁)

ここでは表現というものを作用單位で考えていくことの重要性を指摘している[8)]。認識されたものを表現したり，表現されたものを認識したりという體驗にとって，「認識作用の主觀性と認識內容の客觀性の區別」とう形で〈作用〉と〈內容〉の關係が問題となる。ここでは文獻［10］一章の記述に從って，言語を使用した表現の意味作用について整理しておく。表現の意味作用には以下の二種類の區別が設けられる。前半の三つは〈作用〉の主觀的な連關の區別，後半の三つは〈內容〉の客觀的な連關の區別である。(a) は (a') と，(b) は (b') と，(c) は (c') というように，前者と後者の區別は緊密に關係している。それを「作用・意味・對象の相關關係」と呼ぶ。

(a) 物的な表現現出による感性的作用における直觀的表象
(b) 意味附與作用（或いは單に表現作用という）
(c) 意味充實作用
(a') 表現そのもの
(b') 意味
(c') 對象

(a) における物的な表現現出とは，發せられた音聲としての現出や，書かれたものや印刷されたものとしての現出であるが，これらはその場限りの物的な多樣性ではなく，(b) の意味附與作用によって「生化」され，〈作用〉の統一による現出者として，(a') の

との證左であると考えられよう。

8） 表現を作用單位で考えていくことについては，情報や認識の電子的な形式化の上で重要な視點であるが，それについては今後の研究に委ねる。

表現そのものとして捉えられる。逆に（b）は（a）に基づけ[9]られて相關者として（b'）をもつ。

言語表現による意味作用は（a）（b）の意味附與作用（表現作用）で盡くされる譯ではなく，對象を與える（c）の意味充實化作用が構成要素として加わって，初めて認識作用となる。例えば，名辭的表現の意味作用の場合，その名辭に對應する對象の知覺がその表現を充實させる。『論理學研究』ではインキ壺の例が述べられている。

> 私が「私のインキ壺」と言い，そしてそのインキ壺そのものが現に私の前にあり，私がそれを見ているとしよう。この場合，この名辭は［私のこの］知覺の對象を名指している。しかも〈自己の特性と形態を名辭という形式で明確に表明している意味作用〉によって，その對象を名指している。…この事物を「私のインキ壺」として認識するという體驗は，一方の側の表現體驗と，他方の側のそれに該當する知覺體驗とを，一定の仕方で端的に融合する認識作用によって構成されるのである。（Husserl［19］邦譯『論理學研究』4 卷 40，42 頁）

名辭による意味作用が，その對象の知覺作用を通して充實化される。このとき表現の言語的な意味がその知覺作用への媒介となる譯である[10]。

以上を纏めると，意味作用は〈表現〉を通して，〈意味〉する〈對象〉が志向されている。基本的に〈表現〉は〈意味〉を媒介にして〈對象〉を指示する。〈意味〉を持たずに〈對象〉を指示するのが，「指標」である（文獻［19］第一研究「表現と意味」）が，〈表現〉は必ず〈意味〉をもつ。表現の意味作用（意味附與作用）では，〈表現〉に對する〈對象〉への關係は本質的ではなく，その〈對象〉は〈意味〉を通して構成される。この〈對象〉を與える作用を意味充實作用と呼ぶ。意味概念は〈表現〉の〈對象〉への指示關係で與えられると考えがちであるが，そうではなく，〈意味〉の理解が充實化の仕方を與える。

9）「基づけ」Fundierung は『論理學研究』第三研究で扱われる概念で，以下のように定義される。α が μ による「基づけ」を必要とする（或いは單に α が μ に基づけられる）とは，α が μ との間に，μ と結びつかなければ α が實在しないという本質的關係が成立している場合である。基づけを必要とするものが「非獨立的」と言われる。

10）言語的な表現の場合には，表現の論理的な意味が知覺作用の媒介になる譯であるが，逆に知覺作用に表現を與える場合には，知覺という多樣性を同一性としてのある種の意味（知覺的意味）を通して捉える必要がある。この點については意味概念の擴張が必要とされ，我々は文獻［17］の議論を待たなければならない。

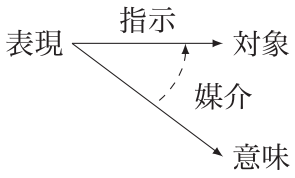

圖 4　表現と意味

卽ち，〈意味〉の理解に先立って〈對象〉が與えられる譯ではない。この様子を圖 4 で示した。

節 2.3 では，漢字を表語文字とする考え方の問題點について纏めておいたが，ここでその問題點について議論するための方針の概要を提出できる。漢字の意味作用は一般の言語表現による意味作用であるから，物的な表現現出による作用（漢字の形）は意味附與作用（字義・字音）と密接に關係している。その根據を與えているのが意味充實作用である。漢字性についての議論はこの「作用・意味・對象の相關關係」の究明から行なうことができる。漢字の解釋やその深化については，意味充實による明證性がその根據を與える。ここでは議論しなかったが，知覺的意味に表現を與えることについては，文獻［17］以降での議論を待たなければならない。

このように意味作用に注目することで問題點の多くを扱える可能性が出てきた。漢字の基本的な性格を精密化するためには，表現の構造が意味附與と意味充實の兩者とどのように關係しているかを見なければならない。この枠組みを與えるのが範疇的形式である。これについて次に簡單に見ていこう。

3.2　範疇的形式

言語的な表現の場合には，〈表現〉が語のようなものだけでなく，文や言述などの構文論的な構造をもつ。その構造に應じて〈對象〉も様々なものが對應する。〈表現〉が判斷である場合には〈對象〉は〈事態 Sachverhalt〉であるだろう。事態を與える充實化作用は判斷の構文論的な構造に從って，其々の構文要素の充實化の仕方から構成される。このような構文的な構造によって與えられる充實化を〈範疇的直觀 Kategoriale Anschauung〉と呼ぶ[11]。

11）範疇的直觀の簡單な例を見てみよう。文獻［19］第六研究 18 節には簡單な數式の例が述べられている。5^3の意味は 5・5・5 に立ち返り，5 の意味は 5=4+1，4=3+1，3=2+1，2=1+1 というように，各段階で構成される意味によって充實化されると考える。一般の↗

判斷が，例えば述定「S は p である」のような構文形式をもつ場合に，S そのものに對應する成分以外の成分は基本的に範疇的であると考えられる。S が名辭の場合は名指される對象は，個體性，普遍性，疑似個體性（想像對象の場合）をもつが，述語 p や「である」のような構文要素が名指す對象は，構文型對象性，悟性的對象性をもち，偏時間的である[12]。次節では漢字の意味作用を理解する手掛かりとして，範疇的形式の一つである統語論的形式について見る。範疇的直觀の詳細については『論理學研究』[19] を參照してほしい。

4　漢字の意味作用

本節では言語表現としての漢字を統語論的形式から見る。漢字の表現作用は意味附與作用であり，その意味の根據が充實化として與えられる。これまでの漢字についての多くの議論が，漢字が表現している意味を考えるとき，意味と稱しているものが字義なのか，それともその漢字を含んでいる言述に對して，言述の意味を決めるために漢字が果している役割なのかが曖昧であった。漢字を意味作用として考察することは，このような曖昧さを除く。

文字は判斷などの表現を構成する成分ではあるが，構文論的な構造における成分（單位）ではない。ここでは漢字を判斷などの表現を構成する固有の構造形式として捉え，その機能を見てみる。本節では Husserl の『論理學研究』[19] 第四研究「獨立的意味と非獨立的意味の相違ならびに純粹文法學の理念」及び『形式論理學と超越論的論理學』[18] で議論された純粹論理學的文法を使って，漢字の意味作用について見ていこう。

4.1　純粹論理學的文法

Husserl の純粹論理學的文法は純粹論理學の最下層に位置するもので，對象領域から區別された意味範疇を取り出し，判斷構造の形式的な構造を研究する部門である。これは歴史的，經驗的な言語の文法ではなく，言語表現が理解可能になるための形式的な條件を規定する[13]。

判斷もその構文的な構造に從って，段階を遡って意味が構成される。このような充實化の仕方が意味を與えるのである。

12）各對象性の存在性格，時間性格については多くの議論すべき點が殘されているが，本稿では扱わない。詳しくは，例えば文獻［9］などを參照してほしい。

13）この形式的な條件を使って，漢字という言語表現の構成要素がどういう役割，あとで導入する概念で使うと，統語論的形式と統語論的素材を持ち得るかを本稿では議論する。

ここでは後の議論の理解に必要な範圍で，純粹論理學的文法について纏めておく。これは先に見た「範疇的直觀」を意味の面から形式化したものである。主に『形式論理學と超越論的論理學』[18] 附論 I「統語論的形式と統語論的素材，核形式と核素材」で扱われているが，Edie の文獻［16］の II 章の解說も參考にした。文獻［16］は純粹論理學的文法の課題を以下の三つに整理している。

1. 非獨立－獨立の關係で關係し合う「意味の純粹範疇」の確立
2. 部分的意味を完全な形の全體に組み立てる複合の法則
3. 基本的な統語形式の閉じた體系，派生と樣相の操作

これらの課題について，それぞれ簡單に見ていこう。どんな言語表現もそれぞれが獨立な斷片から構成されている譯ではなく，分割していったときに互いが深く結びつく非獨立な部分からなる。課題 1 はどのような形式が許されるのかを扱う。課題 2 は事態への完全な意味をもつ判斷に對して，その構成要素が組合わされて判斷全體の意味を組み立てる仕方を究明する。例えば，文を考えたときに，その構成要素である幾つかの語がどのように組合わされて，文全體の意味と關係するかという問題である。語に統語論的な形式が與えられ，その形式によって語を非獨立的な意味として，文という一つの完全な獨立的意味に結合することができる。こうして統語論的形式と統語論的的素材の區別が明らかになる。語の場合で言えば，語は〈辭項 Terminus〉として意味の核を含み，その核は語が統語論的形式を變えても同じに留まる。文の意味は構成要素である辭項の意味に媒介されるのである。課題 3 は文の形式を變える操作，或いは對象への關係と關わりが深い名辭化などの操作を扱うが，本論とは關係しないので，ここでは省略する。

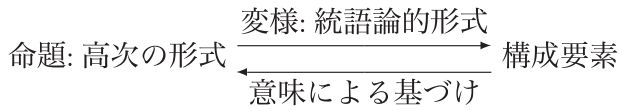

圖 5　統語論的形式

4.2　核素材としての漢字

Husserl の『形式論理學と超越論的論理學』附論 1 では，非範疇的形式としての核形式とその素材[14]について述べている。本稿では漢字を扱うための道具としてこの核形式と

14）文獻［18］の邦譯では，Kernform, Kernstoff, Kerngebilde を「主要形式，主要素材，主要形成物」，或いは「核心形式，核心素材，核心形成物」と譯すが，本稿では「核形式，核素↗

核素材を使用する。

文獻［16］では統語論的な素材に現れる核について，以下のような簡明な説明をしている。

> かりに私が「この木は緑だ」（This tree is green.）という文のなかに與えられている「統語素材」を檢討すれば，「木」（tree）とか「緑の」（green）とかいった語が取り出されてくる。これらの語は「形成されていない素材」とみなすこともできるが，しかしそれらは完全に非形成的なのではなく，「非統語形式」と呼ばれるべきである。たとえば，私が「緑の」とか「緑」，「類似の」とか「類似性」といった語を想像のなかで自由に變様させてみるならば，それらはいろいろに異なった統語形式のうちに現われうるわけであるから，そのさまざまな統語形成のなかで本質的に同一にとどまる非統語的意味の核に到達することになる。（Edie［16］邦譯『ことばと意味』82 頁）

このような發想が核形式，核素材の概念を意味付けている。今，最低次の統語論的な形式が，複數の非統語論的な形式で表わされるとき，その中に共通の核を認める場合，それが核形式を構成する。我々は書記言語による文のみを獨立的な意味範疇と考えているので，文の形式を分解していき，最後に到達するのがある種の記號素である。その記號素に對應する形式の核素材が文字になる。

語や形態素と漢字の關係は，ある語やある形態素が漢字にどのように分割されるかによって決まる。これは語をどのように形態素から構成するかという事柄（語構成論）[15] と同じように扱えるだろう。もし漢字がある語に名詞的に含まれるのであれば，その漢字は名詞性の變様を伴って語と關係する。形容詞性についても同様。詳しくは附論 A を參照してほしい。

5　文字と字符という二つの階層

本節では裘錫圭著『文字學概論』［12］の二章「漢字的性質」で議論された字符論を取り上げる。漢字の基本的な性格，及び漢字構造の理解には缺かせない論考である。また，その議論を敷衍し，その問題點を指摘したものに文獻［1］がある。裘氏の論考「漢字的

↘ 材，核形成物」に統一する。

15）語構成論については，例えば文獻［13］等を參照してほしい。

性質」の出版經緯についても文獻［1］は詳しい。

5.1 字符論

ここでは裘氏の字符論について議論し，漢字の意味についての一層の理解を目指す。

文字は言語の符號[16]であり，文字が使用する符號とは階層が異なる。例えば，構造の上から二つの符號に分析できる字である合體字“花”の場合，字“花”は漢語における草花の｛花｝という語の符號であるが，“艹”（草冠，元々は“艸”，卽ち上古の草字に作る）と“化”は字“花”が使う符號である（“花”は一つの形聲字であり，“艹”は形旁，“化”は聲旁である）。

構造の上から分析できない字である獨體字にも文字とその文字が使用する符號の二つの階層が存在する。例えば，古漢字[17]の𝚹のような字は，｛日｝のような語の符號として見れば，音と義をもつ一つの字であり，“日”字が使う符號として見れば，ただ單に太陽の形を象る一つの象形符號に過ぎない。

言語記號としての文字の性質，及び文字が使用する字符の性質を明確に區別して議論すべきである[18]。文字が使用する符號である字符は，語との關係によって以下の三つに

16） 裘錫圭『文字學概論』［12］には「符號」と「記號」という二つの用語が使われている。裘氏は「字符」の議論を文獻［15］に基づくとしているので，それぞれ symbol と sign の譯として使われた可能性がある。牛津高阶英汉双解词典（第六版商务印书馆，2005）でも主にそのように譯されている。文獻［1］も裘氏の使い方を踏襲する。しかし，日本語での使用，特に記號學の文脈では，「記號」と「符號」が丁度，中國語と逆になっている。「字符」が用語として熟しているため，本稿では字符論の範圍では裘氏の用語法に從う。裘氏の符號概念は節 3.1 で述べた Husserl の〈表現〉に近く，〈意味〉を媒介に〈對象〉を指示するが，裘氏の記號概念は Husserl の〈指標〉に近く，〈意味〉の助けを借りずに〈對象〉を指示するものとして，本稿では扱う。

17） ここで扱う古漢字には便宜的に白川フォントを使用したため，文獻［15］［1］ものとは多少形狀が異なる。白川フォントについては以下を參照：
http : //www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/shirakawa/index.html

18） 記號學的に考察した場合，煙が文明のしるしを表わすことや交通信號や標識などの非言語的な記號と，言語を區別する性質として二重分節が擧げられる。（統合）記號が形態である記號表現のクラスを，ある種の意味である記號內容のクラスに對應させるものであるとき，第一次分節は記號表現のクラスあるいは記號內容のクラスを，ある記號のクラスの因子クラス（論理積）で表現できる場合をいう。その記號のクラスの要素を記號素という。第二次分節は記號表現のクラスが因子クラスになる場合で，その要素を表現形成素という。言語は二重分節，卽ち第一次分節と第二次分節の兩方をもつものといえる。字符論がここで言う二重分節を意味しているのかは，檢討されるべき事柄であるが，ここでは示唆に留めておく。このような指摘は構造主義隆盛のころに旣に指摘されていて，例えば，G. Mounin : *Clefs pour la Linguistique*（Éditions Seghers, 1968. 邦譯福井芳男他譯『言語學とは何か』大修館書店，1970.）には「漢字は第二次分節の書記單位で構成されていて，これ↗

分類できる。

・意符：文字が表わしている語と意味上の關係がある字符
・音符：文字が表わしている語と語音上の關係がある字符
・記號：文字が表わしている語と關係がない字符

字符のこの三分類に對して，文獻［1］では，字符の中から記號であるものを同定することの難しさとともに，次のような疑問を呈している。

> 裘氏のように，漢字の字符のなかに，記號と記號でないものがあり，記號でないものから記號に變化するのが記號化だと考えるやりかたでは，漢字の字符を分析しても，だれしも納得のいく結果をうみだすとはいえない。それよりももっと相對的にとらえて，記號に限らず漢字の字符全體にわたる傾向として「記號化」というものがあると考えるべきなのではないだろうか。（淺原［1］11頁）

と述べ，以下の二つの記號化を區別することを提案し，漢字の歴史のもとで，記號化の傾向の意味を問う。

1. 字形の表現機能を小さくする記號化
2. 字符の表意表音作用を小さくする記號化

文字に由來する字符の場合は，本來の文字の表音表意作用を弱め，その文字を記號化する必要がある。從って，文字に由來しない記號を字符と一緒に使用できるためにこそ，文字の記號化があったとする。

> 文字の表音作用と表意作用はその文字だけを表わすものであるのに，字符は複數の文字の字符になってこそ字符なのだから，ひとつの文字の發音や意味を表わすための表音作用と表意作用とをそのまま保持していては，字符としてか

↘ は口頭語の音聲的な第二次分節の轉寫には對應しないが，異なった記號に恒常的な書記要素をまた用いるということによって，記憶の負擔は輕減される」（邦譯 78 頁）と述べ，部首の例を擧げている。

えって不適當だからである。(淺原［1］13 頁)

これらの考察は記號表現として音と形の兩方をもつ漢字の場合に，記號の效率化のための第二次分節の性質と關係していて興味深い。これを直感的に述べてみれば，音素の定義が形態素を區別できるだけの音韻情報をもつ卽ち，形態素や語が表現したい事柄に應じて無數に廣がるのに對して，音聲言語の場合は人が簡單に扱えるほどに少ない音素(或いはアルファベット文字）しか持たないということと比べてみれば分かり易い[19]。しかし，漢字については二次分節を考えれば事が濟む譯ではなく，字符がどのような對象であるのか，字と字符の階層がどのように異なるのかを明確にせねばならない。

5.2　核素材としての字符

これまでは漢字の意味作用について考察したが，漢字の構造について考えるということはどのようなことであろうか。また，字符論では文字と字符の違いや，字符概念が不明瞭であった。また，文獻［1］で考察された二つの記號化の意味についても考えてみたい。これらの問題に漢字の表現作用の充實化という面から，明確化することを試みる。

われわれが表現作用そのものを正常に行なっている場合，われわれは物理的客觀としての表現を構成する諸作用のなかで生きているのではない。われわれの《關心》はこの物理的客觀にあるのではなく，むしろわれわれは意味附與作用のうちに生きているのであり，われわれはもっぱらそれらの諸作用のうちに現出する對象的なものに向かっている。…物理的表現へ特に注意を向けることも確かに可能であるが，しかしその場合には〔表現〕體驗の性格も本質的に變化することになり，もはや普通の語義での《表現作用》ではありえなくなる。(Husserl［19］邦譯『論理學研究』3 卷 207-8 頁)

字符に注目することは，文字による意味作用から文字の意味作用の內，物的な表象作用に注目することであろうか。意味作用が三つの作用の統一であることを節 3.1 で見たが，三つの作用が密接に關係していて，物的な表象作用だけを單獨で考えることはできない。

そこで漢字の意味作用全體を一つの獨立的な意味をもつものと考え，漢字の構造にあ

---

19)　記號の經濟性についての議論は，例えば L. J. Prieto : *Messages et signaux*（Presses Universitaires de France, 1972. 邦譯丸山圭三郎譯『記號學とは何か —— メッセージと信號』白水社，1974.）を參照。

る種の範疇的形式を導入し，その枠組みで素材と形式を考えることにしよう[20]。

まず形聲文字の具體例から見てみよう。形聲文字の形式は意符という形式と音符という形式からなる。字“花”は形聲文字であり，意符［艸］と音符［化］をもつ。これら二つの字符は他の字に對しては，意符としても，音符としても，また記號としても用いられるだろう。字符［艸］は“艹”に形を變えて，字“花”の意味と關係をもつ，卽ち，意符として字“花”と關係している。これを字符［艸］が意符の形式に變様していると捉える。同様に，字符［化］は音符として，字“花”の音と關係をもち，音符の形式に變様していると捉えることができる。圖 6 は形聲文字“花”の〈意味〉と〈字符〉との關連を示す。表現/花/ が對象〈花〉を指示し，その表現/花/が意符として字符［艸］を，音符として字符［化］をもつことを簡明に示している。

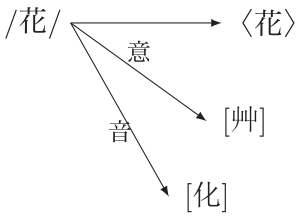

圖 6　形聲

様々な字の構造部分として含まれている部分字は，意符としても，音符としても，或いは記號としても他の字に含まれることがあるので，意符の形式，音符の形式，記號の形式などの様々な形式の核形式が字符なのである[21]。そして，特定の字符は，例えば，意符の形式に變様したときに，意符として他の字の部分に含まれることができる。

獨體字の場合も同様で，例えば，字符［日］が意符に變様して，字“日”になることができ，また，他の字の部分字として意符になることもある。假借や轉注も，借りた字を音符や意符への變様と考えることもできる。有無の字“無”が舞うを意味する字“無”の假借であるというのは，字符［無］が音符に變様して，有無の字“無”に使われている。

20）漢字の構造を範疇的形式として扱うことは Husserl の純粹論理學的文法からの逸脱であるように考えられるが，書記媒體に構造を考えることは，必ずしも歴史的，經驗的な言語に依存したことではない。例えば，英語などの表音文字を考えた場合でも，單語に注目したとき，それが語の構造という普遍性を扱うことに對應する。特に語義をそれに含まれる形態素義から構成するという語構成論に，形式を導入することは可能であろう。

21）字符が漢字の構造形態，意符や音符という形式に對する核素材であることについて，詳しくは附論 A を參照下さい。

前節の考察で，漢字は純粹な統語論的形式に對する核素材であることが理解できた。それに對して，字符は漢字の構造形態，意符や音符という形式に對する核素材である。明らかに漢字と字符は形式の次元を異とする。

6 お わ り に

「漢字は表語文字である」という主張に接すると，K. Gödel の松果眼が閉じる體驗が念頭に浮かび，何か落ち着かない心持ちにさせられる。「表語」という言葉に含まれる「表」がどのような意味で使われているにしろ，音聲や文字が語を表わしているという感覺に違和感を覺える。Gödel は眼が感覺的對象を知覺するのと同じように，數學的な對象を含む抽象的對象を知覺するための器官，松果眼があると確信していた。眼を閉じると目の前の感覺的知覺が失われるように，松果眼が閉じる體驗を語る。文獻［14］には，その體驗について多くのことが語られているが，ここでは言葉に關する，ほんの一部を引用しよう。

> 私の松果眼を閉じることで，私は明らかに言語を失っていた。あるいは，より正確に言うなら，私は一定の音群を聽き取ったり發音したりする習慣は保っていた。《こんにちは》が《こんにちは，お元氣ですか》を呼び出し，この二番目の文句が《元氣ですよ，ありがとう，であなたは》を呼び出す，ということは私はわかっている…。今やそれが私の陷っている事態なのだ。私は何も理解していない。私の身體が記憶の中に保っている，すっかり出來上がっている文句をくり返すことで滿足しているのだ。（カスー=ノゲス『ゲーデルの惡靈たち ―― 論理學と狂氣』［14］89 頁）

漢字は語を表わしているかという問いに對して，ここに至って否と明確に答えることができる。それが形態素であっても答えは否である。今ならはっきりと「漢字は純粹な統語論的形式に對する核素材である」と答えることができる。漢字は言語單位を指し示すようなものでなく，それ自體が意味作用を伴う內容をもつのである。漢字の意味（字義）は，その字が文において出現する統語論的形式において變樣し，漢字の一つ上の形式における意味を基づける。そのようにして漢字は文全體に對して意味を媒介するのである。

同樣に，字符は字という形式に對する核素材である。字符は文字の構造である形式，卽ち意符・音符として出現し，その形式に從った變樣を遂げて，文字に意味や音を與え

るのである。漢字には長い歴史と文化が堆積していて，漢字としての意味作用，字符による意味作用に多くのものが蓄積されている。それら意味作用の根據はいつも作用單位で示されねばならない。

本稿は文字論と字符論を手掛かりにして，漢字の意味と構造について議論したが，これは記號學でいう記號素と表現形成素を對象としたことになる。しかし，文字と字符を書記單位として記號學的に考察することでは，既存の言語體系についての記號の經濟性などの議論にしか結びつかない。本稿での考察はそれが核形式と核素材の枠組みを使用して，事態から表現へ，また表現から事態の理解への關係を通して，漢字の表現作用を了解することへの根據を示すことが目的であった。その議論を通して，從來，漢字を扱う上で出てくる様々な意味や概念を明確化できたと思う。これまでに示唆しただけで，詳細には議論できなかった幾つかの問題點について，ここで纏めておこう。

1. 漢字自體の音義と字符の字義の扱いの問題。兩者の形式は次元が異なり，漢字の構造における形式に從って，字符の音義は變様を被る。字符は漢字構造の形式に對する核素材であるので，字符の音義はもともとの複數の漢字の共通項を示している。これが「字符の表音表意作用を小さくする記號化」の姿である。但し，本稿では具體的な構成については扱えなかった。
2. もう一つの記號化，「字形の表現機能を小さくする記號化」についても，核素材の概念で扱えると豫想できるが，更なる檢討が必要である。また「文字に由來しない記號」も漢字の構造の一部として，字符になり得る。
3. 轉注や假借で見た際に問題となっていた，字の音義と，それを借りた語の音義をどのように考えるべきかという問題。上で述べたように，借りた漢字は字の形式にあるものではなく，字符の形式をもつ。當然，借りる段階で字への形式の變様を被る。
4. 漢字解釋の根據，特に古文字解釋の可能性については，素材が言語以前の先述定的經驗に關わることが扱われなければならないだろう。知覺經驗に言語表現を與える際の問題點については，節 3.1 の注 10）で言及した。
5. それぞれの漢字或いは字符の內容については，その意味作用ごとに究明され，それが眞理としての根據を與える。特に古文字の解釋については作用單位で情報化の手掛かりを與えるだろう。文字が使われている表現がその文字の意味を與え，文字に關する事態がその文字についての知識を與える。
6. 文字學における漢字についての歴史的，經驗的な知識がこの枠組みでどの程度，具體的に表現できるのかについては，更なる論究を必要としている。

最後に Husserl が自分の讀者に向けて熟考を促すために書いた言葉を引用して，本稿の拙い論考を終えよう。本稿が彼の言う熟考に遠く及ばないとしても，多少の考察になっていることを願うのみである。

> われわれが折にふれ或る書物を讀んで「思想內容」を得るとき，その思想內容を成すものはいつも必ずやきわめて複雑な綜合的な形成體であるが，そうした形成體を日頃われわれが把握するのはいかにしてであるか，その仕方のことを，どうか讀者は考えていただきたい。そして，讀了した事柄を理解する場合，それも，表現の基礎を成しているこのいわゆる思想的根底に關して，理解する場合に，何が本當に原的に顯在化されてくるか，ということを，どうか讀者はとくと熟考していただきたいと思う。（Husserl［17］邦譯『イデーン Ⅰ-2』233 頁）

【謝　　辭】

『說文解字注』の研究會である「點注會」を主催された古勝隆一先生に感謝致します。この會に參加できたことが，漢字について考察する上で大きな糧になっています。淺原達郎先生には文獻［1］をご提供戴きました。また，日頃より漢字についてご教示下さる「漢字學研究會」の諸先生に感謝致します。特に村上幸造先生には文獻［11］についてご教示戴きました。Wittern 先生には英文要旨についてご教示戴きました。最後にいつも支えてくれる妻留美と娘に感謝します。

參 考 文 獻

［1］淺原達郎：漢字の字符 —— 戎肆庵讀裘記之一，私印，1996.
［2］植村玄輝：眞理・存在・意識 —— フッサール『論理學研究』を讀む，知泉書館，2017.
［3］大西克也：文字統一と秦漢の史書，書學書道史研究 24 : 93-103，2014.
［4］河野六郎：文字論，三省堂，1994.
［5］佐藤駿：フッサールにおける超越論的現象學と世界經驗の哲學 ——『論理學研究』から『イデーン』まで，東北大學出版會，2015.
［6］白須裕之：文字體系の統合による漢字情報の形式化 ——『說文解字注』における音注を事例として，情報處理學會「人文科學とコンピュータシンポジウム」論文集：209-216，2013.
［7］白須裕之：漢籍の電子的な翻刻について ——『說文解字注』の Unicode 轉寫を事例として，東方學報 89，京都大學人文科學研究所，2014.
［8］鈴木崇志：フッサールの他者論から倫理學へ，勁草書房，2021.
［9］谷徹：意識の自然 —— 現象學の可能性を拓く，勁草書房，1998.
［10］濱渦辰二：フッサール閒主觀性の現象學，創文社，1995.
［11］村上幸造：轉注とは何か，漢字學研究 5 : 1-13，2018.
［12］裘錫圭：文字學概要（修訂本），商務印書館，2018.

[13] 朱德熙：文法講義，杉村博文・木村英樹譯，白帝社，2018.（原著語法講義，商務印書館，1995.）
[14] ピエール・カスー=ノゲス：ゲーデルの惡靈たち —— 論理學と狂氣，新谷昌宏譯，みすず書房，2020.
[15] Chao, Yuen Ren（趙元任）: *Language and Symbolic Systems*, Cambride University Press, 1968.
[16] J. M. Edie : ことばと意味，瀧浦靜雄譯，岩波書店，1980.（原著 *Speaking and Meaning—The Phenomenology of Language*, Indiana University Press, 1976.）
[17] E. Husserl : *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Husserliana III, Martinus Nijhoff, 1977. 邦譯渡邊二郎譯『イデーン I-1』，『イデーン I-2』みすず書房，1979，84.
[18] E. Husserl : *Formale und Transzendentale Logik*, Husserliana XVII, Martinus Nijhoff, 1974. 邦譯立松弘孝譯『形式論理學と超越論的論理學』みすず書房，2015.
[19] E. Husserl : *Logische Untersuchungen*, Husserliana XVIII, XIX/1, XIX/2, Martinus Nijhoff, 1984. ; Philosophische Bibliothek 601, Felix Meiner, 2009. 邦譯立松弘孝他譯『論理學研究』みすず書房，1968，70，74，76.

A　核形式と核素材の形式化

漢字と字符に關する核形式 Kernform と核素材 Kernstoff を統一的に説明するために，Husserl の純粹論理學的文法の用語を形式的に表現する。簡單のため，最低次の（統語論的）形式 $A_i(i=0, \ldots, n)$ に對して，

$$A_i=\prod_{j_i=0}^{n_i} B_{j_i}$$

であるとし，ある $l_0, \ldots, l_m$ に對して，形式 $B_{l_0}, \ldots, B_{l_m}$ が核形式 K を持つとする（勿論，複數の核形式が存在する場合もある）。ここで積 $\prod$ は形式の列を表わす。このとき，例えば，素材 $a \in A_i$ が構成要素 b_l をもち，$a=\cdots b_l \cdots$ であるとき，核素材 $k \in K$ があって $a=\cdots k^{B_l} \cdots$ となる。但し，k^{B_l} は k の形式 B_l への變樣 Modifikation を表わす。

この記法で漢字と字符における核形式と核素材の例をそれぞれ考えてみよう。

漢字の場合：例えば，名詞性の形式 N と形容詞性の形式 A に對して，それに共通の核形式 K とその核素材 $k \in K$ があって，$k^N \in N$, $k^A \in A$ となるものがある。このとき，漢字 k は名詞性と形容詞性に變樣する意味をもっている。例として，漢字「白」が「白さ」と「白い」の意味をもつ場合が該當する。

字符の場合：意符の形式を S（Semantic），音符の形式を P（Phonetic），記號の形式を Si

(Sign) とする。これら三つの形式に對する核形式が字符の形式 G (Graphic) である。卽ち，字符の形式は一つであり，字符に意符・音符・記號の區別はない。ただ字符には漢字の部品としての使われ方 (變樣) にその違いがあるだけである。

・形聲字に對する形聲の形式が，例えば SP であるとき，形聲字 $k \in SP$ は $k = g^S h^P$ のような字符 $g, h \in G$ で構成される。

・會意字に對する會意の形式が，例えば SS であるとき，會意字 $k \in SS$ は $k = g_1^S g_2^S$ のような字符 $g_1, g_2 \in G$ で構成される。